

てきたが、医療や福祉の現場において人々の「居る」を支えようとしたとき、同時に人々の「閉じ込め」が起こることもある〔東畑 2019: 302〕。こうした医療や福祉現場が抱えるダークな部分を目の当たりにし、自分自身がその制度の一端を担っていることに複雑な感情を抱いて「居づらさ」を感じることも度々あった。

訪問したスペシャル・スクールではそのような葛藤を抱くことがなかった。筆者がその制度に完全に組み込まれていなかったことが一因とも考えられるが、そこは筆者にとって少なくとも「居る」が脅かされる場ではなかった。では、訪問したスペシャル・ス

クールが、「障害」をもつ生徒や教職員、私の「居る」をいかにして支えていたのか。今後とも調査していきたいと思う。

引用文献

- ゴッフマン, E. 1984. 『アサイラム—施設被収容者の日常世界』(ゴッフマンの社会学 3) 石黒毅訳, 誠信書房.
- 東畑開人. 2019. 『居るのはつらいよ—ケアとセラピーについての覚書』医学書院.
- 中江優花. 2021. 「インド・ケーララ州におけるスペシャル・スクールの実践と意義—その「包摂性」に着目して」『アジア・アフリカ地域研究』21(1): 1-35.
- 夏目琢史. 2009. 『アジールの日本史』同成社.

かけがえのない居場所

—サードプレイスとしての闇市—

北 嶋 泰 周*

終身刑を言い渡されたブルックスという老囚人は 50 年の服役期間を経て仮釈放を言い渡されるが、彼は泣きながらそれを拒否しようとする。シャバに出た孤独な彼は、我々にとっての日常生活についていけず「疲れ果てた、不安から解放されたい」という言葉を残して首吊り自殺をした。これは 1994 年公開の映画『ショーシャンクの空に』で描かれ

た、我々なら誰も行きたいとは思わないであろう刑務所という空間が、ひとりの元老囚人にとっては唯一の「かけがえのない居場所」であったことを印象づけるシーンである。我々には到底受け入れられない場所が、別の誰かにとっては「かけがえのない居場所」となることもある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

近づいてはいけない空間―「釜ヶ崎」「西成」「あいりん地区」

筆者が調査した大阪市西成区の北東部は「日本のスラム街」や「日雇い労働者の街」などと形容され、主に3つの名称で広く知られている。それは西成郡今宮村の小字名に由来し、簡易宿泊所（通称：ドヤ）が密集する空間を指す俗称である「釜ヶ崎」、同じく寄せ場やドヤが位置する西成区から派生した俗称である「西成」、そして1966年に発生した「第五次暴動」を発端として「釜ヶ崎」「西成」のネガティブなイメージを払拭するために大阪府、大阪市、大阪府警によって正式名称として地区指定された「あいりん地区」である[原口2010]。1960年前後の当該地域はマスコミなどの影響により、貧民街的な性格と反社会性や暴力行為を要因とした俗称としての「西成」が生まれ、この地域一帯を暴力の街である釜ヶ崎という印象を与えてきたとされている[大橋1961:9]。筆者が調査中に参加していた食料物資の配布活動をしているNPO団体の代表副理事は「子ど

もの頃から両親に西成は近づいてはいけない場所だと言われてきた」と語っている。その後1970年の大阪万博に向けての建設ブームと労働者確保が政策課題として浮上する中、労働力の流入を見込んだドヤの経営者は三畳の部屋を一畳にして部屋数を増やすなどといった大規模な建て替えを実施し、あいりん地区は家族持ち労働者から単身労働者の街へと変化していく[原口2010]。しかし1990年代バブル崩壊以降に求人募集が減少し、高賃金な多能工の配置といった生産過程の合理化と土工の若年化が進んだことによって、労働市場から排除された旧来の日雇い労働者たちはホームレス化していく[大倉2010]。現在では高齢化した労働者たちの自然死に加え、生活保護受給や「あいりんシェルター」などの無料簡易宿泊所などによって、野宿者は旧あいりん総合センター周辺に十数名、三角公園と四角公園に数名ほどにまで減少している。

筆者が毎朝通っていた闇市（通称：泥棒市）では睡眠薬や精神安定剤などの向精神薬や海賊版の違法DVDが販売され、初めて来た若者に対してはひとりの男性が「兄ちゃん、飲み物（睡眠薬）探してんの？ビデオ（違法アダルトDVD）探してんの？」とニタニタ笑いながら声をかけてくる。睡眠薬を求めてくる客が「まだ（薬の効き目が）抜けてないなあ」と呂律が回らない声を出しながら辺りを徘徊し、通行人が少しでもスマホのカメラを向けようものなら「何撮ってんねんボケが！」と中指を立てながら相手を怒鳴り散らして詰め寄る、まさに絵に描いたような



写真1 朝日に照らされる午前6時半の泥棒市

混沌とした空間であった。

孤独な男を救った空間—サードプレイスとしての泥棒市

2021年9月6日の早朝、筆者は泥棒市でひとりの露店商であるI氏（80代男性）に出会った。I氏はあいりん地区ではなく東大阪市に在住し、いつも雑貨やガラクタなどの商品を車で持ってきて販売していた。I氏は定年まで水道の配管工として従事し、奥さんと3男1女の子どもに恵まれた。奥さんとは四国遍路の旅をし、4人の子どもを大学に進学させるなど、誰しも想像できる普通の家庭を築いた。しかし55歳の時に奥さんに先立たれ、退職後に夢だったスナックを開業するが失敗して退職金の半分以上を失った。ひとりで年金暮らしをする中で孤独を感じるようになったI氏は酒に溺れ「あの時の自分は完全に頭がおかしくなっていた」と語っている。I氏はある日、天王寺公園を散歩しているといくつかの露店を発見し、それから頻繁に客として天王寺公園の露店商たちと関わるようになった。天王寺公園のホームレスたちが立ち退きに遭うのと同時にI氏はあいりん地区の泥棒市へと移っていく。これまで客として来ていたI氏だったが、次第に自分の家にある雑貨やガラクタを道端に並べるようになり、他の露店商と同じように人とお喋りをするために営業を始めて現在に至る。I氏は以下のように語る。

「家におっても、起きて、テレビ見て、ご飯食べて、風呂に入って、寝るだけになってしまう。ご飯も宅配にしたら、いよいよ外に

出なくなってしまう。こんな生活してたら体壊すやろ？自分も昔はそうだった。やっぱり人と関わって話すことが一番大事だと思うし、だからドロ市に来てるんやで。」

筆者が多くの露店商と話していると同様の語りは頻繁に聞かれた。タバコと衣類を販売している露店商のT氏（40代男性）は商品が全く売れなかった日も「別に金を稼ぎたくて来ているわけではないからね。ただ遊びに行く感覚。みんなと話すのが楽しいだけ」と語る。睡眠薬や海賊版DVDを販売する露天商のH氏（30代男性）は「ここの人たちは独り身が多いでしょ。家と仕事を往復してるだけだと寂しいからさ、こうやってドロ市に来て人と喋りたいって思うんじゃないかな」と語った。実際にI氏に目標売上額を聞くと「350円」と返ってきた。この350円はI氏が泥棒市で営業を終えた後、萩之茶屋駅近くにある行きつけの喫茶店で食べるモーニング代である。筆者は営業終了後にI氏に連れられ、その喫茶店でモーニングを食べながらI氏や他の常連客とさまざまな話を語り合った。ふと気づくと喫茶店に来てから時計の長針は既に2周半も動いていた。

妻に先立たれ、子どもが家を離れ、事業に失敗した結果として酒に溺れてしまった孤独なI氏を救ったのは我々の目には混沌とした空間のように映り、子どもの頃に親から「近づいてはいけない場所」と言われるというあいりん地区の泥棒市であった。筆者も初めてあいりん地区を訪れた時、大量のゴミと小便の匂い、霧のようにタバコの煙が辺りを包み込む泥棒市の混沌とした雰囲気思わず足が



写真2 I氏が行きつけの喫茶店で提供されている
モーニングセット

すくんでしまった。泥棒市を訪れる前までは、露店商が可能な限り経済的利益を追求しているのではと推測していたが、実態は「誰もが平等に扱われ、何よりも会話が尊重され、確実に友達と出会えて、まとまりがゆるやかで、いつも遊び心に満ちている〔オルデンバーグ 2013: 98〕」サードプレイス¹⁾的な空間を露店商たちは創り出していた。その結果、I氏のような「人と関わりたい／お喋りしたい」と思う孤独な人々にとって、我々からするとお世辞でも行きたいとは思えない混沌とした泥棒市という空間が「かけがえのない居場所」になっているのである。

「泥棒市」という空間の変容

泥棒市は著しく変容してきた。いわゆる昔ながらの「西成のおっちゃん」たちが露店営

業をしているだけではなく、I氏のようにあいりん地区以外の地域から車でやってくる人もいればT氏やH氏のような比較的若い人々が新たに露店商として参入している。筆者がよく店番をしていた違法アダルトDVDを販売するY氏（30代男性）は筆者が初めて訪れた7月24日の時点で、露店営業を開始してわずか数週間程度しか経っていなかった。若い露店商たちに聞き取りを行なうと、その多くは何かしら経済的に困窮した結果としてあいりん地区に仕方なく流れ込んで来たわけではなく、高校卒業後に「自由」を求めて全国を放浪しているうちにあいりん地区を気に入った者や、世界各地を貧乏旅行した後と同じような空気感を味わえる場所へ行きたいと考えてあいりん地区を目指した者であった。現在の泥棒市は彼らのような新たな露店商たちによる主体的実践によって再構成されつつある。

「かけがえのない居場所」を見つける

2021年2月、新型コロナウイルスの感染拡大によって深刻化する孤独・孤立問題、それに起因する自殺問題の対策として、日本はイギリスに続き世界で2番目となる孤独・孤立対策担当大臣の職を設けた。ステイホームやテレワークという言葉が囁かれるようになり、家と職場や学校の往復すら出来なくなった。このニューノーマルという名のア

1) オルデンバーグは、家庭としての第一の場所、個人を生産的な役割に変える労働環境としての第二の場所と定義したうえで、サードプレイスを酒場やカフェ、本屋などの「家庭と仕事場の領域を超えた個人の人、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのための場を提供する、さまざまな公共の場所の総称〔オルデンバーグ 2013: 59〕」であるとしている。

ブノーマルな生活形態に馴染めなくなった人々の中には、ブルックスのように自ら命を絶ってしまう人もいたことだろう。ローマ人に従えば『生きる』ということと『人々の間にある』(inter homines esse)ということ、あるいは『死ぬ』ということと『人々の間にあることを止める』(inter homines esse desinere)ということは同義語〔アレント 1994: 20〕であり、我々は他者なくして生きていくことはできない。いつ終わりを迎えるかも分からない生活の中で孤独感到苛まれた時、我々は新たな「かけがえのない居場所」を見つける必要がある。まさにI氏にとっての泥棒市のような「おしゃべり」が生み出す場所、つまり他者を必要とする場所である。そのためには、我々は「空間」というものを改めて検討しなければならない。なぜなら、我々が「サードプレイス」だと認識していたはずのカフェや酒場といった飲食店は「黙食」が進み、他者と関わる機能は著しく減少したからである。新型コロナウイルス感染症の拡大は、我々の空間認識を相対化させるには十分すぎるものであった。

愛する妻を亡くし「孤独」という自己限界に陥った時にI氏は、—我々のように「一般的」な人生を歩んでいた時のI氏にとっては到底受け入れることができなかったであろう—泥棒市という一見すると混沌とした空間

を取り込むことで、同時に立ち現れる「サードプレイス」的な空間を見出し、自己変容とともに自前で生きる世界を構築していった。²⁾ コロナ禍を生き、いつ「孤独」という悪魔に襲われるか分からない我々にとって、もはやI氏の語るライフヒストリーは他人事ではない。今の我々にとって重要なのは、自らがもつ「これがサードプレイスだ」という捉え方は数ある空間認識のひとつでしかないという視点をもつことである。それによって我々は他者を受容すること、そして不可視化されていた空間のバナキュラーな性格を捉えることができ—これまでは到底受け入れられなかった場所を含めて—自らの利用可能な空間を拡張させる契機を生み出す。その視点は、自身が「孤独」状態に陥った際に自らを救う「かけがえのない居場所」を見つける術となるだろう。我々はブルックスという老囚人を通して、刑務所という場所が「かけがえのない居場所」となっていたことを知っているし、それは我々がその術を根源的に備えていることを裏付けていると筆者は信じている。今現在、孤独に押し潰されようとしている全ての人々に「かけがえのない居場所」が見つかり、自前で生きる世界を構築できるように願って。

2) 関根は、他者に身を開いて自己が常にヘテロ化しながら自己が変容・成長していく生き方をヘテロトピア的デザインの生と表現する〔関根 2018〕。I氏の場合、混沌とした天王寺公園の露店や泥棒市、そこで営業する露店商たちといった他者を取り込むことで自己がヘテロ化し、限界状態であった自己から変容・成長した。このヘテロ化は泥棒市のサードプレイス的性格を見出し、I氏の自前で生きていく世界の構築という創発へと繋がっていった。

引用文献

- アレント, ハンナ. 1994. 『人間の条件』 志水速雄訳, 筑摩書房.
- 大倉祐二. 2010. 「放置された不安定就労の拡大とホームレス問題—寄せ場の日雇労働者を野宿生活に追い込んだ要因」 青木秀男編『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』 ミネルヴァ書房, 136–159.
- オルデンバーグ, レイ. 2013. 『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』 忠平美幸訳, みすず書房.
- 大橋 薫. 1961. 「釜ヶ崎の沿革と地域構成」『ソ

シオロジ』 8(3): 5–11.

- 関根康正. 2018. 「下からの創発的連結としての歩道寺院—インドの路上でネオリベリズムを生き抜く」 関根康正編『ストリート人類学—方法と理論の実践的展開』 風響社, 319–362.
- 原口 剛. 2010. 「寄せ場『釜ヶ崎』の生産過程にみる空間の政治—『場所の構築』と『制度的実践』の視点から」 青木秀男編『ホームレス・スタディーズ—排除と包摂のリアリティ』 ミネルヴァ書房, 63–106.

「生まれ」によって奪われゆく子どもたちの夢

—埼玉県の在日クルド人コミュニティへのフィールド調査より—

赤坂知美*

夢をもつということは、将来に対して希望を抱き、今を生きる原動力となる行為だろう。特に子どもの頃は、得意なことや褒められたことをきっかけに、大きな夢をもつことも多いのではないだろうか。後に、さまざまな人々と出会っていく中で、自分が井の中の蛙だったと気づかされることも多々あるが、

恥ずかしながら、私の小・中学生の頃のアルバムを見返すと、将来の夢として「小説家」と書かれている。学校の先生や両親に作文を褒められたこと、そして読書が好きだったことが、小説家を目指すきっかけだった。

その夢は、文才あふれる同級生や後輩との出会いや、小説コンクールに応募して落選が続く中で変化していったが、アルバムにその夢を書いた当時は、努力すれば小説家でも総理大臣でもロックスターでもなんでもなれる、つまり可能性は無限大だと思っていた。

夢をもつことは自由だ。しかしそんな幼心に夢を思い描くことができない子どもたちに、国内フィールド調査で出会った。

「ワラビスタン」フィールド調査

2021年7月から8月にかけて約2週間、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科